

## 博士論文要約

本研究は、現代中国語における“給”を含むさまざまな構文の意味的特徴に関する記述を行うものである。

“給”は、「与える」という意味をもつ動詞としての用法[例文(1)]のほか、文法化したと見られる用法を持っている。これらの用法は、「後ろに名詞句を伴う(A)」用法と「直後に動詞句を伴う(B)」用法より大別できる。

(1) 我给了他一本书。

私は彼に本を一冊あげた。

A、後に名詞句を伴う。

(2) 我送给了他一本书。

私は彼に本を一冊贈った。

(3) 我给妹妹买了一辆车。

私は妹に車を一台買った。

B、直後に動詞句を伴う。

(4) 我给买了一辆车。

私は車を一台買った。

(5) 小张给打死了。

張さんは殴られて死んだ。

最新版の『現代漢語詞典 第6版』では、例文(1)のような“给”を動詞、Aのような名詞句を後続する“给”を介詞、Bのような直後に動詞句が伴われる“给”を助詞と分類する。

しかし、“给”を含む構文には、「反復の制約」があり、“给”が介詞的に使われる用法で、本動詞の“给”の前にもう1つの“给”で導かれた間接目的語をもつことが容認されない。

(6) a. 我给老师送了一本书。

b. \*我给老师给了一本书。

私は先生に本を一冊贈った。

“给”の「反復の制約」は、介詞と動詞だけでなく、介詞と介詞、介詞と助詞の組み合わせにも適用される。ところが、ほかの介詞も同形の動詞をもつ場合が多いが、このような制約は観察されない。

(7) 他在晚上八点以后在。

彼は夜の八時以後に居る。

この「反復の制約」は、これらのさまざまな用法が、同音異義の“給”を派生しているのではなく、“給”の語としての同一性は保たれた多義であると考えなければ、説明が難しい。

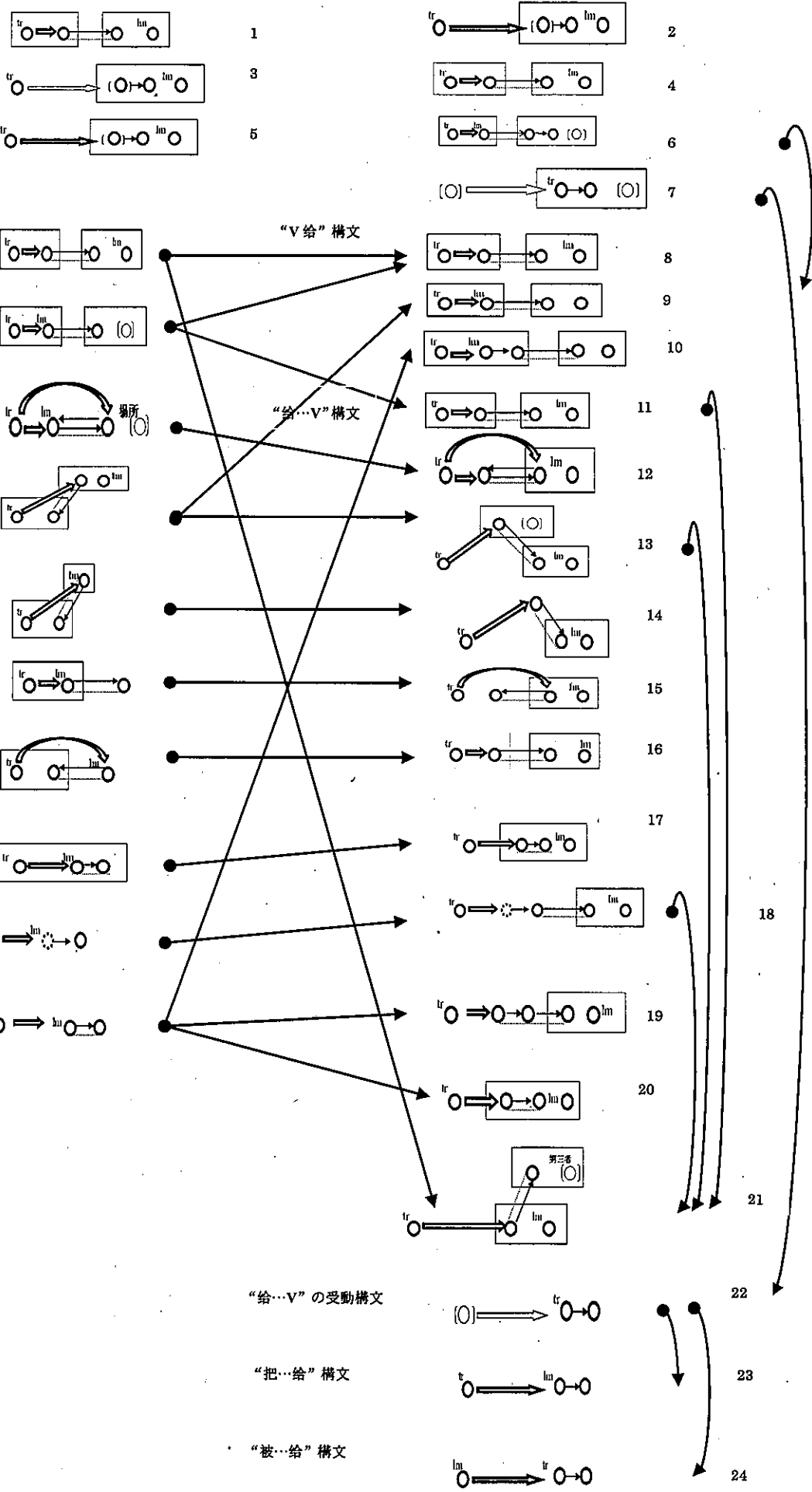
したがって、本研究は、“給”を含む各構文がすべて本動詞の“給”構文から拡張した構文であるとする。プロトタイプの本動詞の“給”構文は、直接目的語と間接目的語をもち、間接目的語の状態変化に認知的な際立ちがあるスキーマと、補語を伴い、間接目的語が背景化されて、直接目的語の状態変化に認知的な際立ちがあるスキーマがある。

“V給”構文と“給…V”構文では、本動詞の“給”の二重他動詞としての性質が、構文スキーマとして維持されている。一方、受動表現の“給…V”構文や“把…給”構文、“被…給”については、間接目的語が背景化され、補語を伴う本動詞の“給”構文からの拡張と見なす。

“給”を含む各構文は動詞に応じて、異なる拡張を経て、ネットワークを構成すると主張する。図式化すると次のようになる。

(trはトラジェクター、lmはランドマーク、□は支配領域、⇨は働きかけ、領域を越える→は位置変化、領域を越えない→は状態変化、……は同一要素を示す。)

本動詞の“給”構文



本動詞の“給”構文は二重目的語構文を構成し、主語(S)と間接目的語(NP1)は人間であり、直接目的語(NP2)が具体物である(図の1)。構文の示す意味は、主語の直接的な働きかけによって、事物NP2が人間であるNP1が接近可能な領域にはいる。この構文から、NP2の位置変化と、NP1のNP2を所有するという状態変化の両方が見られる。

(8) 我给他一本书。

[作例：自然度 1.00]

私は彼に本を一冊あげる。

本動詞の“給”から拡張した構文として、NP2が抽象物である構文(図の2)、Sが人間でない構文(図3)、NP1が非情物である構文(図の4、5)がある。これらの構文は、それぞれメタファーによる意味拡張と思われる。

(9) 谢谢您给了我一个商业机会。

『谁认识马云』「北京」

ビジネスチャンスをくださって、ありがとうございました。

(10) 这小小的成功给了他更多的信心。

『世界 100 位富豪发迹史』「北京」

この小さな成功は彼に多大な自信を与えた。

(11) 农夫们给了土地充足的肥料。

[作例：自然度 1.00]

農夫たちは土地に十分な肥料をやった。

(12) 他的慈爱的母亲在贫苦的生活中给了他的童年许多温暖。

[張斌(2010:620)]

慈しみの母が貧しい生活の中で彼の少年時代に温かみをあげた。

プロトタイプの本動詞“給”からの拡張で、結果補語や方向補語を伴う構文がある。このような構文は、間接目的語が現れることができず、直接目的語のみが“給”に後続する(図6)。

(13) 7岁时我生了场病，我的肾有问题得吃药。但他们给错了药，我病得更厉害了。

『我的世界我的梦』「北京」

私は7歳の時病気で、腎臓に問題が出て薬を飲まなければならなかった。でも彼らが薬を間違えてくれたから、私の病気はさらにひどくなった。

また、直接目的語が構文の主語として現れ、“給”の主語が背景化されて、本動詞“給”の直後に結果補語のみが続く構文もある(図の7)。これはNP2の変化に認知的な際立ちがある構文であり、補語を伴う一種の結果構文である。このような構文は第五章で述べる受動表現のプロトタイプである。

(14) 当时想找活儿干的人很多，而工资也给得不高。 『读者（合订本）』「北京」

当時は仕事を探す人が多くて、給料も高くなかった。

本動詞の“給”構文から拡張した“V 給”構文(第三章)と“給…V”構文(第四章)に関して、朱德熙(1979)は、「授与」を表わす構文において、「授与」の意味が含意される動詞は“V 給”の二重目的語構文をとりうるが、それに対して、動詞自体が「授与」の意味を持たない動詞は“給…V”形式で「受け手」を表わすことができるとする。

第三章で考察した“V 給”構文は、動詞の後置目的語を必ず二つも二重目的語構文(図8)と、“V 給”の前に直接目的語、後ろに間接目的語をとる構文(図の9、10)がある。

(15) 他卖给我一本书。

[作例：自然度 1.00]

彼は私に本を一冊売ってくれた。

(16) 希腊神话中的神祇，因把天火偷给人类而受到了宙斯的惩罚。 『荆棘鸟』「北京」

ギリシアの神話の中の神が天の火を人類に盗んでやった(盗み与えた)ため、ゼウスに罰せられた。

(17) 陕西省5年内3.7万户教工迁新居顺义县将最大块“蛋糕”切给教育。

(『人民日报』1995年9月11日)「北京」

陕西省は5年以内では3.7万世代の教職員に新築に引っ越しさせた。順義県がケーキの最大の分け前を教育に切ってやった(切り与えた)。

前者では、「受け手」が存在し、しかも本動詞の“給”と同様に、「授与」の意味をもつ二重他動詞と、「受け手が潜在する」が、二重目的語構文が構成できない動詞(“寄”・“写”類)に限定される。後者では、取得動詞や動作動詞のような二重他動詞以外の他動詞が適用できる構文である。いずれも、二重目的語構文を構成している。

“給…V”形式を用いる構文も動詞に応じて、異なる拡張を見せている。大別すると、次の2つに分けられる。

i、構文の参加者は同じであるが、“給”を用いる場合には“給”に後続する間接目的語がランドマークとしての認知的際立ちを与えられ、間接目的語となる。

ii、構文の参加者が新たに追加され、この参加者が間接目的語となる。

このうち、iiはさらに、本来の参加者の一つが背景化され、存在は含意されるが表示されなくなるものとそうでないものとに分けられる。

i に関しては、第四章の第2節で述べた朱徳熙(1979)の“寄”・“写”類動詞と第3節で述べた使役移動動詞はこれに当たる。“寄”・“写”類動詞では、V 単独では背景化されている授与の「受け手」が、“給…V”構文ではランドマークとして動詞に前置される(図の 11)。

(18) a. 小李写了一封信。 [作例：自然度 1.00]

李さんは手紙を一通書いた。

b. 小李给小张写了一封信。 [作例：自然度 1.00]

李さんは張さんに手紙を一通書いた。

使役移動動詞は、“給…V”構文を用いると、移動の終点(あるいは起点)をランドマークとして選択する構文となる(図の 12)。

(19) a. 张三涂了漆。 [作例：自然度 1.00]

張三はペンキを塗った。

b. 张三给墙涂了漆。 [岸本(2011:33)]

張三は壁にペンキを塗った。

どちらの構文も移動物と移動の結果として状態が変化する人あるいは場所への働きかけに焦点を当てると見ることができる。

ii に関しては、朱徳熙(1979)の述べる“給…V”形式をとる授与構文と、朱徳熙が介詞“给”の構文と見る受益構文を含む。追加される参加者は「移動物の受け手」(図の 13, 14, 16, 18, 19)である場合と、「受益構文」(図の 20, 21)である。

前者は、単独では「移動物の受け手」を参加者とはしない動詞である。例えば、図の 13 の示すように、取得動詞のような「移動物の起点」を参加者として含意する場合、“給…V”構文を用いると、「移動物の起点」は背景化されてプロファイルされなくなる。

(20) a. 他偷了小张一支笔。 [作例：自然度 1.00]

彼は張さんからペンを一本盗んだ。

b. 他给小李偷了一支笔。 [作例：自然度 1.00]

彼は李さんに与えるためにペンを一本盗んだ。

c.\*他给小李偷了小张一支笔。

このような意味的特徴は「製作動詞」と「動作動詞」を V とする“給…V”構文(図の 18、19)にも観察される。どちらも“給…V”構文において、状態変化した事物の移動を含めた拡張では「移動物の受け手」を追加する。

(21) 张三给李四烤肉。 [作例：自然度 1.00]

張三は李四に渡すためにお肉を焼く。

(22) 我给他做饭。 [作例：自然度 1.00]

私は彼に食事を作る。

第四章の第4節で論じた再帰的用法において、「飲食・感覚類」では、最終的に事物がトラジェクターの側に帰着するという変化があり、「取得動詞」構文と共通の側面を有する。一方、「着脱類」では、トラジェクター自身の身体が事物の位置変化の起点や終点となり、使役移動構文とも見ることができる。「身体部位を対象とする他動詞」では、状態変化するのはトラジェクター自身の身体部位であり、物の位置移動が見られない点で、「飲食・感覚類」および「着脱類」と異なる。

“給”が追加されて、「脱再帰の“給…V”構文」となると、事物自体の単なる受け手ではなく、状態変化を起こしたり情報の受け手となったりする参加者が追加されることになる(図の14~17)。

(23) a. 母亲吃清淡饮食。 [作例：自然度 1.00]

母親があっさりとしたお食事を食べる。

b. 我给母亲吃清淡饮食。 『梁冬对话罗大伦』「北京」

私は母親にあっさりとしたお食事を食べさせる。

(24) a. 弟弟穿上了毛衣。 [作例：自然度 1.00]

弟はセーターを着た。

b. 她给弟弟穿上了毛衣。 [作例：自然度 1.00]

彼女は弟にセーターを着せた。

(25) a. 小张擦眼睛。 [作例：自然度 1.00]

張さんは目を拭く。

b. 小李给小张擦眼睛。 [作例：自然度 1.00]

李さんは張さんの目を拭いてやった。

もう一つの拡張は、追加される参加者が「受益者」である構文である。これは、「具体物」が移動しない場合と、移動する場合がある。

具体物が移動しない場合は、トラジェクターの行為の対象が、ランドマークである「受益者」の領域のものである場合である(図の20)。

(26) 我给他开门。 [作例：自然度 1.00]

私は彼にドアを開けてあげた。

この場合は、上述の「身体部位を対象とする他動詞」と同様な振る舞いが見られる。「身体部位を対象とする他動詞」も、具体物が人間の体の一部であるため、移動ができない。“給…V”構文となると、その身体部位は“給”に導かれる間接目的語の身体部位となる。

一方、具体物が移動する場合は、例えば、「卖」類動詞構文のように動詞単独では「移動物の受け手」を参与者とするものを含むが、“給…V”構文となると、「受益者」が追加され、「移動物の受け手」は背景化され、存在だけが含意される(図の 21)。

- (27) a. 他卖了我一个苹果。 [作例：自然度 1.00]  
彼は私にリンゴを一個売った。  
b. 他给小李卖苹果。 [作例：自然度 1.00]  
彼は李さんの代わりにリンゴを売っている。  
c. \*他给小李卖了我一个苹果。

また、「寄」「写」類動詞構文のように、「移動物の受け手」が含意されるが、“給…V”構文にのみ現れることができるような場合には、「受益者」が追加されると、新たに出現した「移動物の受け手」が再び背景化され、存在が含意されるだけで、構文に現れることができない(図の 21)。

- (28) a. 我寄了五本书。 [作例：自然度 1.00]  
私は本を五冊送った。  
b. 我给老师寄了五本书。 [作例：自然度 1.00]  
私は先生に本を五冊送った。  
c. 我给老师寄了五本书。 [作例：自然度 1.00]  
私は先生の代わりに本を五冊送ってあげた。  
d. \*我给老师寄了五本书给小李。

このように、“寄”“写”類動詞構文は、動詞単独では「移動物」をランドマークとするが、“給…V”構文となると、「移動物の受け手」をランドマークとする構文と、新しく加わった「受益者」をランドマークとする構文との二義性が生じる(例文(28b)と(28c))。

「取得動詞」と「製作動詞」のような「移動物の受け手」を追加できる動詞(図の 13, 18)でも、“給…V”構文でさらに受益者を追加して「移動物の受け手」を背景化する構文(図の 21)との二義性が生じる。



(29) 我给妹妹买了一辆车。 [施閔淦 (1981:33)]

a. 私は妹に車を一台買った。

b. 私は妹の代りに車を一台買ってやった。

(30) 我给他做饭。 [作例：自然度 1.00]

a. 私は彼に食べさせるために食事を作る。

b. 私は彼の代わりに食事を作ってやる。

最後に、第五章で分析した“給…V”形式の受動表現は、補語をもつ本動詞の“給”構文と関わりがあって、SとIOの背景化、DOの前景化、それに結果要素をとるような共通性をもつとして、直接目的語が主語となる本動詞の“給”構文から拡張した構文(図の22)であると考えられる。

さらに、“給”は“把”構文や“被”構文に入り、“把～給”構文(図の23)および“被～給”構文(図の24)を構成し、この場合も、文末のVP動詞句の示すDOの状態変化を強調する。

(31) 稿费给少了。 『1995年人民日报』「北京」

原稿料が少なかった。

(32) 小王给打死了。 [作例：自然度 1.00]

王さんは殴られて死んだ。

(33) 我把大门给锁上了! 『骆驼祥子』「中日」

門は錠をおろしてきたけど!

(34) 屋里已被小福子给收拾好。 『骆驼祥子』「中日」

家の中は、小福子の手ですっかり片づけられていた。

このように、本動詞としての“給”構文を中心として、“給”を他の動詞と組み合わせたさまざまな構文が大きなネットワークを構成している。

本論文では、従来さまざまな構文で現れると指摘してきた“給”について、基本的にすべて動詞であるという観点から分析を行った。

プロトタイプの本動詞“給”は、二重目的語構文を構成するが、それを構文スキーマとして“V給”構文と“給…V”構文にも応用できる。朱徳熙(1979)では、本動詞の“給”を含め、本論文で扱う“V給”構文と“給…V”構文の“給”はすべて動詞であると認めるが、“給…V”構文の「服務」の意味を表す“給”は介詞であると主張する。本論文で明らかにしたように、この場合の“給…V”構文は、「受益者」が追加されることによって、直接目的語の帰着点が背景化され、結果として、授与の場合と同様に、二重目的語構文となっている。したがって、「服務」の意味を表す“給…V”構文の“給”も動詞であると判断する。

一方、受動の意味を示す“給…V”構文に関しては、二重目的語構文とはみなせない点に着目し、従来の観点とは異なり、補語を持つ本動詞の“給”構文をプロトタイプとして拡張した構文であると分析した。この場合の“給”は、間接目的語と直接目的語の両方を持つ二重他動詞の“給”と比べて、動詞の性質が薄れることが見られるが、周辺的な成員として動詞と見ることもできる。

“給”の全体像とそのつながりを示したのが、本研究の成果である。